

## 「循環する、私のための、私の人生」

### 思いやりという潤滑油

狩野倫子

1. 動機
2. インタビュー
  - 2 - 1 私のところの中 インタビュー前
  - 2 - 2 箱根山を目指したら
  - 2 - 3 誰のためでもなく
  - 2 - 4 「作品」 - そのうらにあるもの
  - 2 - 5 大切なもの
  - 2 - 6 心地良さ その根っこにあるもの
3. 結論 - インタビューを終えて
4. おわりに

#### 1. 動機

私はインタビューをクリーニング屋さんのおじさんにすることに決めた。おじさんは我が家に洗濯物をとりにきてくれ、仕上がった衣類を届けてくれる一見普通のクリーニング屋さんである。しかし、私は何度かおじさんと玄関で会話を交わしたりするうち、彼の魅力に気がつきはじめたのだ。

まずおじさんは仕事にたいしてとても真摯な態度で臨んでいる。おじさんの仕上げたシャツは着ていて本当に気持ちがいいし、とても仕事が丁寧なのである。少しでもおじさんが衣類を仕上げている納得のいかない点があると（こちらからみたら、なんの不満もないのだが）、その点について何故自分が思うように仕上げられなかったか、説明をしてくれるのである。

そして、おじさんと会話を交わしていると、その「あたたかさ」に気がつくのである。その「あたたかさ」とは、やわらかいとか優しい声音の類ではない。その点についていえば、どちらかというところ「ダミ声」である。そのおじさんの「持つことば」や「行動」が私にとって「あたたかい」のである。

例えば、いつも元気に「こんにちは～」と挨拶をしてくれる。この何気ない挨拶なのであるが、具合のすぐれない朝もおじさんの元気声、元気な仕事ぶりをみると、私もがんばらなくちゃ、という気持ちにさせられるのである。

また、我が家が改装中の際、衣替えした衣類を置く場所をつくるのに困っていた。その時、「大変そうだねえ」といって、何もこちらがリクエストしなくても、いつもはずぐにもってきてくれる仕上がった衣類をだまって預かってくれたりしたこともあるのだ。

またある時、おじさんが近所のご老人を車に乗せているのをみたことがある。後で聞いたところによると、おじさんは仕事の合間をぬって近所のご老人を外に連れていってあげ

る活動をしているのだそうだ。

何故おじさんはそのような活動をしているのだろうか。私がおじさんに感じる「あたたかさ」はおじさんをこの活動に至らせているものからきているのだろうか。

以上のような点から、私が「優しい」「あたたかい」と感じるのは、おじさんのことば、行動の背景に「人を思いやる気持ち」が流れているからではないのか、と今のところ推測している。

私はそんな「優しさ」をもった、どこか謙虚でいて、自分の人生にも自信をもって生きている(そのように見える) そんな人に魅力を感じるのかな、と今のところ分析している。

そして、何故私はそのような人に魅力を感じるのか、今の段階では書き表すことができない。「なに」が私にそう思わせているのか。

おじさんとのインタビューによって、もっと深く自分の内面を掘り下げてみたいと思う。

## 2 . インタビュー

### 2 - 1 私のころの中 インタビュー前

私はおじさんのうちに感じる「人を思いやる気持ちが背後にある優しさ」、そんな優しさをもった、どこか謙虚でいて、自分の人生に自信をもって生きている(ように見える) 人に魅力を感じるのかな、とインタビュー前分析をしていた。

そして、インタビューは、おじさんがどんなことを大切に仕事、人生を今まで生きてきたのか、おじさんのことばから色々ききたいな、と思い、あまり質問というかたちでなく、おじさんからでてきた答えから、なんとなく自然にお話を引き出したり、つなげたりするように努めた。そして、そこから私が感じた「優しさ、謙虚さ、自信」を裏付けるようななにかが見えるのかな、と思いインタビューにのぞんだ。

### 2 - 2 箱根山を目指したら

インタビュー場所。Sクリーニング店。おじさんのお店兼おじさんが生活をしている場所だ。初めて人の家にお邪魔する時、なんとなく緊張し、居心地が悪いものなのだが、おじさんの家は、不思議とそんな感覚もなく、自然に話しができる空間だった。

玄関を入ると右手に年季の入ったクリーニングの機械、装置。左手は台所と居間。仕事と生活が切り離されるものではなく、おじさんの人生の舞台、そんな感じがした。

- おじさんはどうしてクリーニング屋さんになろうと思ったのですか？

「手先が器用だったことと、親戚がクリーニング屋をやっていたからさ。そこに15歳で修行に行ったんだ。勉強が嫌いだったしね(笑)」

- 学校の勉強だけが「勉強」じゃないと思うんですけど。

「まあ、俺にとって修行が勉強といった感じかな。」

- いつまで修行されていたんですか？

「今でも修行中だよ（笑）」

- おお！職人気質な感じがする。なぜいまここでクリーニング屋さんをやっているのですか？おじさんはここで生まれ育ったんですか？

「俺は大分の生まれなんだよ。大分から旅行でなんとなく船にのって大阪に下りたらつまらなそうだったから、そのまま東海道線にのって「箱根山」を見に行こうと思ったんだ。途中の湯河原に降りたとき、なんとなく同業の人をみてみたくくなって、湯河原のクリーニングやを覗いたんだ。そうしたらそのまま「手伝ってくれ」といわれ、一日が二日になり、二日が一週間になり一週間が半年になり、結局一年そこで働いたんだ」

ええ！住み込みでですよ？なんでふとしたことでそんなに長く滞在することになったんですか？

「たくさん仕事があったからね。人手が足りなかったんだよ。」

私は大分から湯河原道中の、一見「行き当たりばったり」の行動に、おじさんの「生きる力」のようなものを覚えた。自分で予測もつかないところに出て行ける、というのは自分の中に「自信」というものがあるからこそできることだと思う。自分を信じること。おじさんは「クリーニングという仕事」に対する自信や「人との関わり方」の自信、つまり「生きる力」のようなものに対する「自信」なのかもしれない。「自信」をもちつつも、それに満足することなく常に謙虚で真摯に仕事に向かう態度。それは「まだ修行中」ということばがとっさにでてきたおじさんの表情からもにじみ出ている気がした。

そして私はおじさんが一年間も何気なく訪ねたところで働くことができたのは、決して「人手」が足りなかったから、という理由だけではないと思う。おじさんの「人懐っこさ」「仕事に対する真剣さ」等色々なおじさんの「魅力」がそうさせたのではないかと思う。

### 2 - 3 誰のためでもなく・・・

- おじさんの「仕事」って、いいなあって思うんです。仕上がった衣類をきていて、気持ちがいいというか気持ちが引き締まるというか・・・

「まじめでないとお客さんに飽きられるからね。」

- おじさんにとって「まじめとは？」

「なにをまじめとするか、不真面目とするかで違うだろうけど・・・誠実であることかな。お客さんに対して仕事に対して。自分では「まじめ」と思っているよ（笑）」

- なんで「まじめ」なんですか？

「・・・結局自分がかわいいんだらうね。欲かな」

- 欲って色々ありますよね、金銭欲とか物欲とか食欲とか

「まあお金もそうだけど、いい仕事をしたいとかいい人生送りたいとかかな。だらしのない生活をした方が、楽だもんな。それに俺はおせっかいなんだよ」

- おせっかい？

「そう。俺は良いと思ってやっていることでも、端から見たら「おせっかい」ていわれることもあった。でも結局は人のためではなく自分のためなんだけどね。」

「自分がかawaiiから」。なんて端的な一言なのだろうと思った。私自信もボランティア活動をしているが、最初は「何かをしてあげる」という気持ちがあっても、だんだんとそんな気持ちも薄れ、結局は「自分のため」であることに気づかされるのである。「自分のために、自分の人生を自分の責任で送る」 - そんな一見シンプルであたりまえのようである、実は目をむけないことを、おじさんはしっかり自分を見つめ、自分の責任で人生を送っている。そして、その人生はひとりでまわっているものでなく、仕事をして、その仕事を信頼してくれるお客様がいて、そして自分の生活が成り立つ、それに感謝をする。こんなことを自然に思い描きながら生きていけるおじさんに、私は魅力を感じたのかな、と思った。

#### 2 - 4 「作品」 - その裏にあるもの

- それにしても 50 年もクリーニング屋さんを続ける、ってすごいですね。私は何かを  
究めている人ってすごい魅力を感じるんです

「いやあ、それしかなかったんだよ」

- えー、でもそれだけの理由じゃ続かないと思います。

「うーん、まあおもしろいしね。シャツでもひとつひとつ形が違うんだ。だからみな同じようにやればよく仕上がるってもんでもない。その加減を見極めながらやるんだよ。今はみんな機械で大量に仕上げているからそういう仕事は機械だけではできないだろうね。それにお客さんのところに行っているいろいろ話がきけるのも楽しいよ。でも昔は職人仲間は俺もそうだけど、あれてたな」

- 「あれてた？」

「うーん、明日のことは考えない。毎日の仕事を一生懸命こなす。そして一杯やる（笑）そして荒れる（笑）それが楽しかった。つらいことの方が少ないかな」

- つらいことの方が少ないか。なかなかそう言いきることができるってすごいことだと思うんですけど。

「まあそう思って生きていかないとね（笑）。それに荒れていても（笑）不思議とお客さんには嫌われないんだよ。まわりからは「お前は甘え上手だ。他のやつが言って嫌がられても、お前が同じことを言っても大丈夫だ」って」

- なんかわかるような気がします。おじさんと話していると。ご自分ではなんでだと思いますか（笑）？

「末っ子で母親に可愛がられていたからかな。その母親が早くに亡くなったから甘えん坊なのかなと思う。どこかでさびしかったのかもかもしれない。でもがんばりやだ、ともいわれ

るよ。きちんとやらないと気持ち悪いもの。」

私は毎日毎日のことに真剣に取り組む、そんな「まじめ」な人に魅力を感じる。そして「職人」といわれる人に私は魅力を感じるが多いことに気がついた。何かを究める、というのはすごいことだと思うのだ。なにかの「作品」としてあらわれるもののその裏に、その人の努力と熱意と目にみえないものが沢山積みあげられて「作品」としてでてくる。そのどこか「禁欲的」なものに私は惹かれる。なにかを「究める」までのその努力と熱意に、私は畏敬の念を覚えるのだ。そんなことを「当たり前」のように「洋服を仕上げる」という世界で行うことのできるおじさんに、私は魅力を感じたのかもしれない。

## 2 - 5 大切なもの

仕事をしていておじさんが大切にしていることってなんですか？

「健康で、仕事ができること。つまり仕事があって（クリーニング）それをできること。そのこと自体にいつも感謝すること。元気で、お客様に食べさせてもらっている、てね」  
- 食べさせてもらっているか・・・

「新しいところからきて、新しいお客さんを開拓するってほんと大変なんだよ。よい仕事をしてお客様に食べさせてもらっている。この気持ちで今まで続けてこられたと思うよ。それに仕事は苦にならないよ。50年やってきているし、身にしみているからね。でも満足する仕上がりは半分もないな。びしっと仕上がるのは・・・俺の腕が悪いか、衣類が悪いかってことか??でも昔より安くて仕立ての悪いのが多くなってきているから。それにみんな楽な服装ばかりだから仕事も減ったね。前はお正月明けなんて、ほんと一日200枚ぐらいの衣類がきて、大変だったよー。仕事が減った今でも、65になっても仕事を続けられるって本当にありがたいね。

おじさんの仕事に対しての厳しさのようなものを感じた。そして「感謝をする」という気持ちがここでもとても強く私には伝わってきたのだ。新しいお客を開拓することは本当に大変なのだと思う。でもおじさんは、その仕事の腕とまじめさと、温かい人柄で、「おじさんに洋服をしあげてほしい」と思う人を増やして行ったのだと思う。仕事が減った今でも、「むかしはよかった」と回顧するのでもなく、いまあることに感謝をする、満ちた気持ちでいられる。そんな「強さ」がおじさんにはあるような気がした。そして「健康」でいるためにも、毎日かぼすのしぼったものを飲むことなど、体にいい、と思うのはいつも気をつけて取り入れているということであった。私がかぼすをしぼったものに「鉄瓶」でわかしたお湯とはちみつをいれて頂いた。「普通のやかんより水がまるやかになる」鉄瓶でいれていただいたかぼす湯に、こころもからだも、じわじわと温まる気がした。

## 2 - 6 心地よさ その根っこにあるもの

あるとき、おじさんがご老人を車にのせて走っているのをみたことがあった。そのことをきいてみた。

- おじさんが近所のご老人を外につれだす活動をされているのをみたことがあるのですが、あれはどうしてはじめたのですか？

「おれの姉がそのようなボランティアの人の介護、力をうけたって話をきいてね。じゃあどこかでする人が、それにお返しをしなければいけない、と思って近所ではじめたんだよ」

- 自分が受けた恩でなくて、お姉さんが受けた恩を返すか・・・。

「まあもちろん俺もいつお世話になるかもわからないし、できるうちにしておかないとおばあちゃん達はとても喜んでくれるよ。俺が用事があっていけないと心配するらしいだ。でも最近体力的にきつくてね、前ほど活動できなくなってきたんだ」

- おじさんの定年はいつですか？

「死ぬときが定年だよ。」

- カッコいいなあ。

「今の若い人は大変だね。40, 50でリストラされて、会社員やったことないからよくわからないけど、会社勤めをしている人にすぐ「将来は大丈夫？」ってききたくなってしまふんだよ。50でリストラされたって話たくさんきくけど、本当にかわいそうだなって。じゃあお前になにかしてやれることがあるのか、って言われても、何もできないな。せいぜい声をかけることぐらいしか・・・」

おじさんは何も考えていない、といていたが、人の生き方、生き様をよくみて、その流れを敏感に感じ取り、自分にできること、やるべきことを実行し、そこに自分の存在を見出し、その存在のあることに感謝をしているような感じがした。そこにはお金があるとかないとか、そういった意味ではない「豊かさ」がおじさんの生活には流れているのかな、と私は思う。それは隣に座って話をきいている奥さまの表情からも、私にはなんとなく伺えたような気がする。

おじさんは自然に自分の人生を、自分にとって心地よく「循環」させているのだ、と思った。本当に「自分にとって心地よい」ことは、結局自分のまわりをとりまくものに対しても本当の意味で思いやることなしにはできない土壌であると私は思うのだ。

そして帰り際の一言が印象的だった。おじさんは私にいった。

「今日はおれがこころの洗濯をしてもらったよ(笑)」

素敵な人だな。帰り道、自転車をこぎながらおじさんの笑顔がうかんでいた。

## 結論 - インタビューを終えて

私は「職人」として尊敬する「おじさん」と接したことで「仕事」について考えるようになった。「仕事」といえば、生活の糧、お金をえるための手段という捉え方もあるだろう。しかし、その枠だけにとどまらないのではないかと私は思う。

つまり自らの人生を歩んでいく中で、自分が成すべきこと、そのひとつひとつが「仕事」なのではないかと思うのだ。そしてその「仕事」の積み重ねの過程は、その人の生き方そのものであると私は思うのだ。

するとなぜ私はおじさんに惹かれたのか。おじさんに惹かれた最初のきっかけは、思い起こすと「仕上げられた衣類」の「着心地のよさ」である。その「着心地のよさ」は、ただ単に「うまく仕上げられた衣類だから」というだけの理由でないような思いが、私の中に存在していた。そしてインタビューを通し、なぜ私が「心地よく感じた」のかが理解できたような気がする。その「腕」をもつに至る、おじさんの様々な努力の過程からも伺える、おじさんの「生き方」が、衣類を着たものに心地よさを与えているのだと思った。

そして、さらに私にとってのおじさんの魅力は、「クリーニングという仕事」の枠をこえたところで、自分の成すべきこと、役割を自然と感じ取り、そこでの「仕事」を、まじめに果たすことができることにあるのだと感じた。つまり「クリーニング屋さん」としてのおじさんではなく、「自分の人生という舞台でのひとつひとつの仕事を真摯にこなそう」という生き方をするおじさんに、私は惹かれたのだと思う。

おじさんは、ひとつひとつの「仕事」を紡いで自分の人生を織り成している。そして、その「仕事」と「仕事」の間には「思いやり」と「感謝の気持ち」という「潤滑油」が、ここに確かに存在している。そのことに私はインタビューを通して気がつく。自分を取りまくものに対しての思いやり、そして感謝の気持ち。相手の立場を考えて、自分にできることを探し出そうという、何かところから湧き出るもの。自分がいまここに人生を歩んでいられる、ということに対し「ありがとう」を述べる素直な気持ち。この「潤滑油」をもって、おじさんは自分の人生を「循環」させている。「循環」しているから、いつもそこにはきれいな、やさしい空気が存在する。インタビュー前に感じた、漠然とした「あたたかさ」の源泉の存在をここにみたような気がする。それは、おじさんの人生という「仕事」の積み重ねを成すうえで、わきあがっているものである。その「あたたかさ」を周りにわけあたえ、与えられた者も、自分の「仕事」を紡ぐ過程で「あたたかさ」という糸をつぎ加えることができる。そしてまたその「あたたかさ」を、おじさんや自分の周りにも与えようとする何かを得ることができる、不思議な力。こんな「力」を持ち、気負うことなく周りを循環することができる。これがおじさんの魅力なのだ。

なぜそんなおじさんに魅力を感じるのか。私の中の何がそうさせているのか、考えてみた。いろいろぐるぐる頭の中、こころの中を模索したのだが、結局「これだ」という答えを見つけることはできなかった。

しかし、ひとつだけわかったことがあった。それは、例えばお米ひと粒とっても、そのお米の裏にしっかりと存在するお百姓さんに感謝の気持ちを忘れないように、という姿勢でいた母の存在の影響がある、ということだ。ひとつの「作品」の裏に隠れているもの。そこに目を向け、今見えていないものをみようと懸命に何かを模索する中で、様々な「出会い」が私の中であったような気がする。母に感謝したい。

週末、庭の土いじりをしてみた。土を掘り返すと「みみず」が眠っていた。「みみず」のいる土は、作物を育てるのにとてもよい土壌であるというのを聞いたことがある。木の葉や、土の中の有機物を食べて、それをたくさんの栄養素とともに排出する。その排出したものが、作物の育つ「ふかふかした土壌」のもととなるのだそうだ。みみずは「ふかふかした土壌」をつくるため、「おいしい作物」をつくるうえでの「循環」に欠かせない。

私も自分の人生という様々な仕事の積み重ねに、真摯にたちむかっていきたいと思う。そして「ふかふかした土壌」を少しずつ耕して、実のなる木を育てていけたらと思う。どんな実を育てることができるのか。はたまた朽ちるのか 自分次第である。

## おわりに

「言語文化」という授業のもとではじまったこの活動であった。この活動中感じたことは、ひとつの文章を読んでも、人によって様々な解釈があること。そしてその解釈をめぐるやりとりを成して初めて自分の言いたいこと、伝えたいことが相手に伝わる、近づけるのだ、ということであった。

なぜこの授業は「言語と文化」なのかもう一度考えてみた。

「文化」、といったとき、「日本文化論」や「日本人論」など様々な「文化」があがる。しかしそれらは「文化論」とでしか語れない。授業においても、国民性の議論にもあらわれたが、「文化」「人」とどのような例外もなく「取り出す」ことはできないものであった。「実体あるもの」として取り出すことができなかったとすると、その「文化」は「個人の中の認識」に存在する、ということに行き着く。そして「文化」を「個人」にまで還元するとするならば、そこでは「一対一のコミュニケーション活動」がすべての「核」になることは必然となるであろう。するとそのコミュニケーション活動における「ことば」はどのような役割を果たすのであろうか。

それは人が「言語」、「ことば」を習得するのは「自分」と「自分以外の他者」を結ぶためであると私は捉える。自分が関わっている、認識している様々な「文化」を、「わたしのことば」で、他者にむかって表現することが、自己を表現し、他者と自分をむすぶ原動力につながるのだ。これはすなわち、「社会」の中で「生きる」ことそのものに繋がるのであ

ろう。この「言語」と「文化」を結びつけることが「言語文化活動」であり、この授業はその活動が「凝縮」して行われた場であったように思う。

何げなく私の中の「魅力的な人」というアンテナにひっかかった人にインタビューすることで、その相手にある様々な「文化」をみる。その「相手」の「文化」の「切り取り方」をしているのは、他でもない私自身である。仮にほかの人が同じ相手の「文化」に接したとき、まったく同じ見方、切り取り方をすることはないであろう。

つまり、なにかを通して語ることは、すなわちその切り取り方をする自分自身を結果として見つめ直すことになるのだ。そしてインタビュー相手を媒体として、私は、私自身と社会、自分以外の他者に対して「自分という文化」の一部を発信してきたのだと思う。その「発信」と「受信」を繰り返すことによって、ほかならぬ自分と他者をむすぶ「ことば」の役割というものを改めて認識するきっかけになったと思う。

「日本社会」「日本人とは」など、一般論で語られるものの主体はどこにあるのか。「集団」で語られたことばに「血」は通っていない。「血」が通っていないことばは人の心に触れることができない。「血」の通ったことばとは、自分の立場で、自分のことばとして他者に語り続ける「わたしのことば」に他ならない。そう実感した3ヶ月の活動であった。この「わたしのことば」を「模索」し続ける「ことば」の「往還」関係が凝縮された「言語文化活動」が成されたのが、この授業が行われた810号室であった。そしてこの「ことばのやりとり」をくぐりぬけた私は、また異なる「場面」が幾層にも重なりあう、様々な「社会」を背負って「私の人生」という舞台を生きていく。

「わたしのことば」を持って -

最後に、わたしの無理なお願いを聞いてくださり、たくさんの「あたたかさ」を分け与えて下さった「おじさん」に、こころから感謝の気持ちをここに述べたいと思います。

また細川先生、三代さん、塩谷さん、共に「わたしのことば探し」を行ったクラスメートの皆様、本当にありがとうございました。